



秋田県農業試験場の研究員、椿信一さん。

2年前に田口さんが復活させ、今回の取材で産地を訪問することになったのだ。「んだ、このこん（大根）だ」と、大根を差し出された小室恵美さん（88）は懐かしむようにさすった。「昔はこんなサイズでしたか？」「んだ、こんなもんだ。いいでござんだ」「霜さ当たっても強いですよね」「んだ、なんともねえ」。口下手なふたりは、ときおり沈黙の時間を挟みながら大根の話に花を咲かせていく。沼山地区は5、6年前までは10軒からなる集落だったが、今では4軒まで減ってしまった。沼山大根も集落の人口減少と新品種の台頭、硬いので栽培が途絶えた。「家に理由で栽培が途絶えた。「家に大根のタネはありますか？」「いや、ねえ」「もしまた育てたくなったら言ってください。1000本の大根からタネを採っているの、お返ししますから」。ふたりの話を嬉しそうに見ていた小室恵美さんの奥さんは「まんずおめ、頑張つてつくつてけれ」と目をぴかぴか

させて言った。「はい、つくるのまず、頑張ります」と、田口さんは微笑んで頭を下げた。

秋田県農業試験場。県の農業振興のための研究を行う機関である。今から25年前に「もう大根をつくれないから」と沼山地区の住人から託された沼山大根のタネは、秋田市にあるこの機関で維持されていた。研究者の椿信一さん（56）は、休日にも関わらず我々を快く出迎えてくれた。2年前に田口さんに大根のタネを渡したのが椿さんだった。「田口さんが沼山大根を育ててくれてるのはすっごい嬉しいんですよ！在来野菜を栽培しているのは高齢の方が中心で、残していくのが難しいのに、タネを地域の外に出したくない、というケースも多いんです。田口さんのような行動力のある若い人に渡って本当によかった」と興奮気味に語った。田口さんが育てた沼山大根を手渡すと、「いいですね。あの程度太って元気だし、緑色の部分が長くて形もいい」と嬉しそう



1. 沼山大根の産地、沼山地区の小室さん宅。2. この日初対面だが親切に案内してくれた。3. 地道で、朴訥として、前向きな田口さん。

車一台がギリギリ進めるような細い山道。くねくねと曲がりながら進むとポツリポツリと人家があり、その脇に小さな田んぼがある。刈り跡を見ると誰かが管理しているのがわかるが、家には人の気配がしない。坂道を登り切ると、大きな畑と家が現れた。畑におばあさんが見えたので、「こんにちはー」と声をかけると、「まんず休んでれー（休んでいけ）」と返ってきた。初対面にも関わらず、要件も言わないうちに茶の間に通された。

#### 沼山大根のバトン

ここは秋田県横手市沼山地区。「僕、大仙市で農家をしてて、沼山大根を育てているんです」と、今月号の主役・田口康平さん（36）が大根を差し出した。上半分が濃い緑色で、下半分は白色をした細長い大根だ。沼山大根はこの地で代々育てられてきた大根だが、一時は栽培者が途絶えていた。